

はじめに

出題者が作成した解答を選択すればよい客観式の問題に対して、記述・論述式の問題では解答者が自分で解答を作成しなければならない。解答を作成するにあたっては、まず、問題文の理解が前提になる。問題文がしっかり理解できていれば、文中のどこを踏まえて解答を作成すればいいかがすぐにわかるだろう。傍線部の前後を踏まえれば解答が出せる問題の場合はまだしも、踏まえなければならない対応箇所が傍線部から離れていたり、広く分散している場合などは、問題文全体の仕組みが正確にとらえられていない限り、対応箇所を十分に踏まえることは困難である。

そこで、本書では、問題文全体の仕組みを正確にとらえることを「**論述の基本**」とし、対応箇所が傍線部の前後にあるのか、遠くにあるのか、分散してあるのかといった観点から設問を三つのパターンに分類し、それぞれのパターンごとに対策を述べている。しかし、対応箇所さえ的確に踏まえられたらそれで十分だということにはならない。ここまでだったら客観式の問題でも同じである。記述・論述式の問題では、対応箇所の表現を設問の要求に合うように論理的に組み立てていかなければならないのである。その際に、問題文中の表現がわかりやすい、一般的な表現であるなら、そのまま解答に使用してもいいだろう。しかし、わかりにくい表現であったり、比喩表現であった

り、具体的な表現であったりした場合には、解答者が自分で表現を工夫し、文中の表現をわかりやすい表現、一般的な表現に改めた上で、解答を作成しなければならない。また、傍線部を説明する時に、文中に対応する箇所がない場合もあるだろう。そのような場合には、文脈を十分に踏まえた上で、自分なりの表現を工夫して説明しなければならないのである。

さらに、小説や随筆の問題では、登場人物や筆者の直接は表現されていない心情を文中の表現から推測しなければならない問いや、表現の特徴や効果を説明しなければならない問いも出題される。この種の問いではもろに表現力が試されることになるのである。本書では、このように自分なりの表現を工夫して解答を作成しなければならない設問を二つのパターンに分類している。

以上のように、記述・論述式の問題では、問題文全体の仕組みを正確にとらえる読解力と、必要に応じて自分なりの表現を工夫して的確な解答を作成する表現力が要求されるのである。そして、読解力や表現力を鍛えるためには、とにかく問題文をよく読んで自分で解答を書いてみるしかない。よりよい解答を書くこうとする試行錯誤の中でこそ読解力も表現力も鍛えられるはずである。

本書の構成と使い方

1 本書は第一部「典型問題篇」と第二部「練習問題篇」から構成されている。記述・論述問題（以下、論述問題とする）においては傍線部と対応している箇所を押さえることが前提となるが、その対応箇所は傍線部の前後にある場合もあれば、傍線部から離れている場合もある。また、問題文中に分散している場合もある。さらに、それらの対応箇所を踏まえて解答を作成する際に、問題文中の表現をそのまま使うことができないために、自分なりの表現を工夫しなければならない場合があるし、小説や随筆の問題では、問題文中の叙述を手がかりにして、登場人物や筆者の気持ちを推測し、それを自分なりの言葉で表現しなければならない場合がある。第一部「典型問題篇」では、これらの場合を論述問題の基本的な設問の五つのパターンとして提示している。そして、**例題**の1〜5は、それぞれのパターンの設問を中心とした典型的な問題からなり、設問のそれぞれのパターンごとの対策が述べられている。

2 第一部「典型問題篇」の主眼は、設問をパターンごとに分類し、それぞれのパターンごとの対策を示すことと、問題の後に付してある本文解説、設問解説という「解説」の方にあるわけであるが、解説をいきなり読んだりせず、その前に必ず自分の力で問題に解答を出してほしい。その後で解説を読めば、自分の読みのどの点が甘く、今後どういう点に注意して問題文を読み、解答を作成すればよいかを確認できるだろう。「典型問題篇」のねらいは、「練習問題篇」に諸君が取り組む前段階として、典型的な問題を通して文章の読解法、解答の作成法を提示することにあるのだから、「典型問題篇」をひと通りこなしてから「練習問題篇」に移ってほしい。

だということは理解してもらいたい。
以上の内容を整理してみよう。

〔引き立てられる青年の姿〕

・非力な、罪悪に汚れた自分を世間に曝されるのに
せたま

・威厳を全く持たない恥かしめられた一人の人間
・屈辱を露出したことよって人間の原型のように
め

〔「私」の心理〕

・痛々しい、心の軟いところを踏みつけられたよ
うな印象
・青年は「私」自身の姿のように思われた
・青年のようにされることを耐らないと思ひ、立
ちすくむ
・自分と青年が、むき出しの姿で街上にいたよう
に感じた
→
・やがて家庭を持ち、平然と人と挨拶を交わすよ
うになる
・いつかあの人形のような存在になる

〔世間そのものの異様さ〕

・仮面のようなものを、自分の外側に持つ
・人間の原型を蔽い、飾り立てながら生きる
・仮りの自分を自分だと思ひ込み、安心して生きてい
る

(図3)

設問解説

問一 随筆や小説では、こうした漢字の読みの問題が出題されることが多い。とりわけ、アの「浴衣(ゆかた)」「ヤイの」煙草(たばこ)といった、特有の読みを持つことには注意したい。以下に、頻出度の高い難読語を例としてあげておく(解答は設問解説の後にある)。

- | | | | | |
|------|------|------|------|------|
| ① 土産 | ② 木綿 | ③ 足袋 | ④ 団扇 | ⑤ 時雨 |
| ⑥ 市井 | ⑦ 精進 | ⑧ 素人 | ⑨ 友人 | ⑩ 行脚 |
| ⑪ 境内 | ⑫ 雪崩 | ⑬ 日和 | ⑭ 日向 | ⑮ 黄昏 |
| ⑯ 潑刺 | ⑰ 怪訝 | ⑱ 椅子 | ⑲ 健気 | ⑳ 自徳 |

また、ウの「委(まか)せる」、エの「惨(みじ)め」といった、漢字一字の読みもよく出題されるので、これに関してもおろそかにしないこと。なお、ウの場合、送りがなが「委ねる」となっていれば「ゆだねる」と読む。

ともかくこうした問題が苦手な諸君は、つね日頃からこ